HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	商品分析の根本問題
Author(s)	荒又, 重雄
Citation	北海道大學　經濟學研究, 20(4), 1-33
Issue Date	1971-02
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/31211
Type	departmental bulletin paper
File Information	20(4)_P1-33.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

商品分析の根本問題

荒　又　重　雄

目　　次

Ⅰ 分析対象としての商品について
Ⅱ 商品価値について
Ⅲ 「効用価値説」について
Ⅳ 社会的分業と市場価格

Ⅰ　分析対象としての商品について

「資本制的生産様式が支配的に行なわれる諸社会の富は『尨大な商品集聚』として現象し，個々の商品はかかる富の原基形態として現象する。だから,われわれの研究は商品の分析をもって始まる」，とは言うまでもなく「資本論」冒頭の一句である。この冒頭商品の性格をめぐって，多くの論議のあったところであるが，そうしたことよりも先に，そもそもここで分析の対象として置かれた商品とは何であり，また，何故に商品が分析されなくてはならないかの問題があり，その答えは必ずしも自明のこととしてわれわれにとって共通の前提になってはいないように思われる。冒頭商品の性格が論ぜられるときには，いずれにしろ商品であるということは論議の対象ではない。しかし，いわゆる限界革命以来のあたらしい流れのなかで，「経済学は，諸目的と代替的な用途をもつ希少な諸手段との間の関係としての人間行動を研究する科学である」(1)，といういわゆる希少性定義が有力である今日，冒頭一句はこれとの関連のもとにあらためて検討されなくしてはならないであろ

う。「代替的な用途をもつ希少な諸手段」は，商品であるのかないのかも考えなくてはならない。

いやしくも分析を開始しようとするなら，分析の対象は少なくとも外面的にしろ確定していなくてはなるまい。そうした意味で商品とは何かと問うならば，商品とは使用価値と交換価値という二属性をかねそなえたもの，というのがその答えとなろう。これに対して，有用にして希少な経済財を分析の対象とおく考え方がある。商品と経済財とは，したがって同じではない。概していえば，経済財の方が商品より外延が広い。販売を目的にしない経済財の生産もありうるし，さらには販売などという現象，さらには市場における商品交換などという現象の存在しないところにも経済財はありうるであろう。ロビンソン島など特殊例をのぞけば，経済財はその背後に何らか社会的なものをかくしている。しかし，そこにおける社会的なものは，商品がその背後にかくしている社会的なものにくらべて外延は大きい。

商品を使用価値と交換価値との統一物として把える考え方は，その系譜をたどればアリーストテレスに萌芽をみることができることが「経済学批判」に指摘されていた。アリーストテレスはのべている。「われわれが所有している物の何れにも二つの用がある。そしてその両者ともに，物そのものに即している。しかし物そのものに即していると言っても同じような仕方でではない。何故なら，一方の用は物に固有のものだが，他の用は固有ではないから。例えば，靴には靴としてはくという用と交換品としての用がある。両者いずれも靴の用である。というのは，靴を欲するものに対して，貨幣あるいは食糧と引換えにそれを与える人でも，やはり靴を靴として用いるのだから。しかしそれは固有の用い方ではない。何故なら靴というものが存在するに至ったのは交換のためではないからである」(2)。アリーストテレスは商品の二つの性質を区別する。しかし，「交換品」が生産物の支配的な形態とは認められない，あるいは認めようとしない当時の社会にあって，「交換品」としての用い方は「固有の用い方ではない」，としたのであった。

それにひきかえ，アダム・スミスは，商品が生産物の支配的な形態となっ

た社会にあって「使用上の価値」と「交換上の価値」とをより明瞭に区別し，特定の語によってそれを固定するとともに，有名な水とダイヤモンドの例をもって，「最大の使用価値を有つものにして，往々，交換価値を殆んどまたは全くもたないものがある。これに反して，最大の交換価値をもつものにして，往々，殆んど，または全く使用価値をもたないものがある」(3)と両者すなわち使用価値と交換価値が別のものであることを論じたのである。リカードーもスミスのこの規定を基本的にはうけつぎ，使用価値が全くないときには交換価値もないであろう，と若干の修正を加えた。

マルクスは，こうしたスミス，リカードーの系譜を引いて，冒頭の節の標題を「商品の二要因—使用価値と価値」としているように，むしろ使用価値と交換価値の統一物を商品と規定し，交換価値の質料的担い手を使用価値としたのである。こうした把握は，商品とは何かを一つもいわぬうちに価格を論じたり，商品に，販売のために生産されているもの，といった分析困難なぼんやりとした規定を与えることにくらべてはるかに確実な出発点たりうるものであろう。

しかし，一方すでにジョス・スチュアート・ミルは，リカードーから出発しながらも，「使用価値……は，交換価値の極限である。ある物の交換価値は，どれほどでもその使用価値以下となりうる。しかしそれが使用価値を超えうるように言うことは，一個の矛盾を含むものある」(4)，とのべて使用価値と交換価値を一つの共通の量的尺度で測りうるもの，したがって一方を他方に還元しうるものと考えていたのであった。また，ミルは，「ある物がある交換価値をもつためには，二つの条件が必要である。……それはある何らかの用途をもっていなければならぬ……しかし第二に，……それを獲得するうえに多少とも困難が存在しなければならない」(5)とのべて，経済財の考えに接近していたのであった。

だが，冒頭一句は，当面の研究対象を「資本制的生産様式」と特定していた。そして，そこにおいては，富は諸商品の集合として現象し，個々の商品はそうした富の要素として現象しているものとみとめられていた。であるか

ら，まず問題なのは商品とは何か，なのであり，かりにある物が交換価値をもつのはそれが有用であり，かつ獲得に困難があったという二つの条件のもとにおいてであったとしても，その二つの条件がすなわち交換価値そのものであるとはいえぬ以上，そうした，商品とは何かを自明の前提としたような，「ある物」はつねに商品であるかのような，ところからは出発できなかったのである。

いうまでもなく，マルクスにとって，富は諸商品そのものにみえていたわけではない。アリーストテレスにとっては，「富とは，家長や政治家の用いる道具（奴隷を含む——荒又）の総量であるから」「限界が定められている」(5)ものであった。マルクスにとっては，グルンドリッセの中にのこされた句によれば，「富とは，普辺的な交換によってつくり出される個人の欲望能力，享楽，生産力等の普辺性でなくてなんであろう？　自然諸力——いわゆる自然の諸力でもあり，人間固有の本性の諸力でもある——にたいする人間の支配の完全な発展ではないのか？(7)」とみさだめられていた。アリーストテレスにおけることとなり，富は，ここでは物ではなく，人間の能動的な活動であり，無限に発展しうるものであった。

とはいえ，研究しなくてはならぬのは，富の社会的形態なのであった。肥沃な土地と，それに緊縛されている勤勉な人民によって示される封建的な富に対して，これと区別されるものとしてあらわれたブルジョア的富は，まずはじめに金銀であった。資本が生産を支配しはじめると，次第にブルジョア的富は金銀にかぎらず，スミス流にいうと「あらゆる生活の必需品と便益品」になる。これこそ，言葉をかえてより正確にいうならば，「尨大な商品集聚」である。「尨大な商品集聚」の内容を吟味する第一歩が，その構成要素としての任意の一商品の吟味なのである。任意の一商品は，つねにこの「尨大な商品集聚」を背後にひそめたものとして分析の対象となる。

全体を念頭におきつつ，全体の基本的構成部分の分析から出発する，という方法はアリーストテレス以来のものであると考えられる。アリーストテレスはいう，「日々の用のために自然に即して構成せられた共同体が家であっ

て，……日々のではない用のために一つ以上の家から先ず最初のものとして出来た共同体は村である。……一つ以上の村から出来て完成した共同体が国である。……人間は自然に国的動物である。……自然には国は家やわれわれ個人より先にある。何故なら全体は部分より先にあるのが必然だからである。……各個人はもしそれが孤立させられたとき自足的でないとすれば，国に対して，ちょうど部分が全体に対するような関係においてあるであろうからである」(8)。そして，分析は，国の基本的要素である家からはじめられる。家は，夫と妻，親と子，主人と奴隷という三つの関係に分析され，吟味されはじめる。

冒頭一句は，まず研究対象を「資本制的生産様式」として特定し，その上で，そこにおける富が「尨大な商品集聚」として現象していることから，分析をその要素である商品からはじめるといっているのである。したがって，有用にして希少な経済財が分析の対象になるのではなくして，使用価値と交換価値の統一物としての商品が分析の対象になるのであるし，その商品は，いつも背後に「尨大な商品集聚」を含意するものとして分析されなくてはならないのである。

なお，アリーストテレスにとっては，商品は分析の出発点におかれうるようなものではない。研究対象としての当時のポリス，すなわち「国は，現にわれわれが見る通り，いずれもある種の共同体である」(9)，そして，「最初の共同体」すなわち家にあっては「交換術の働きを容れる余地がない」し，「後の共同体」すなわち村や国においても「物々交換」が支配的であって，やっと「相互扶助が今までよりも国と国との間で行なわれるようになったとき，必然に貨幣の使用が工夫されるに至った」(10)，ものとみとめられていたからである。当時の社会の富は，したがってもちろん「尨大な商品集聚」ではなかったばかりか，金銀の姿をとって，無制限なものとして，あらわれはじめていたブルジョア的富の萌芽も，手に触れるものをすべて金銀にしてくれと神に願って罰をうけた王の寓話を引証して，真実ならざるものと論断されていたのであった。

(1) ライオネル・ロビンズ「経済学の本質と意義」辻六兵衛訳，東洋経済新報社，25頁。
(2) アリーストテレス「政治学」山光光雄訳，岩波文庫，51～52頁。
(3) アダム・スミス「国富論」(1)，大内訳，岩波文庫，65頁。
(4) ジョン・スチュアート・ミル「経済学原理」末永訳，岩波文庫，第3分冊，20頁。
(5) 同　上，30頁。
(6) アリーストレス，前掲書，38頁。
(7) マルクス「経済学批判要綱」高木訳，421頁。
(8) アリーストレス，前掲書，33～36頁。
(9) 同　上，31頁。
(10) 同　上，52～53頁。

Ⅱ　商品価値について

ベーム・バヴェルク以来，蒸留法と名づけられた商品価値の実体を追跡する過程は次のごとくであった。「交換価値はさしあたり，ある種類の諸使用価値が他の種類の諸使用価値と交換されるところの，量的関係すなわち比率として現象する」。だから一見して「商品には内的な・内在的な・交換価値なるものは，――の形容矛盾に見え」もするのだが，交換価値は何かあるものの現象とみるべきである。そして，その何かあるものを探索するために，商品交換の一例として小麦と鉄とがとり上げられ「1クオーターの小麦＝aツエントネルの鉄」という方程式が立てられる。この式は，両項に「ある共通物」があることを示す。また，「他方において，諸商品の交換関係をはっきり特徴づけるものは，まさに，それらの諸使用価値の捨象であるから，この両項から使用価値を捨象すると，残るものは「労働生産物であるという属性」だけであり，また労働といっても，その具体的有用的性格も捨象されているので，「幻のような同じ対象性」，抽象的人間的労働の凝結となっているのである。かくて，交換価値の本体は，対象化され物質化された抽象的人間的労働である，ということになった。

こうしてみると，いわゆる蒸留法による成果は，共通物を「労働生産物」であるところにみとめていることではないのであって，第1に抽象的人間的

労働の，第2に対象化され，物質化され，あるいは凝固したもの，をみとめていることにあるのである。

アリーストテレスは「交易的な性質の共同関係」を吟味していう。「詳言すればかような共同関係の生ずるのは，二人の医者のあいだにおいてではなくして医者と農夫のあいだにおいてであり，総じて異なった人々の間においてであって，均等なひとびとの間においてではない」。交易的共同関係は「しかるに物品が何らかの仕方で均等なものでないならば不可能であろう。だからして……あらゆるものがある一つのものによって計量されることを要するのである」。「交易なくして共同関係はないのであるが，交易は均等性なしには存在せず，均等性は通約性なしに存在しない。もとよりかくも著しい差異のあるいろいろなものが通約的となるということはほんとうは不可能なのである」(1)。アリーストテレスは，量を調整して均等化しうるものは，質的に通約しうるものであるはずである，つまり共通の第三者のあることを論理的に推定する。しかし一方で，交易がおこなわれるのは質のちがったものがむかいあうからであって，かくも差異あるものが通約的になることはありえない，という。マルクスはこれを，奴隷労働の存在を肯定するゆえに人間労働の共通性をみとめえなかったのだと批判したが，それとともに，「物の二つの用」つまり使用価値と交換価値の区別をつらぬけなかったことも関連しているとみとめてよいであろう。

ウイリアム・ペティはすでに人間労働の共通性をみとめる。もしある人が，1ブッシェルの穀物を生産しうるのと同じ時間に，銀1オンスをペルーの大地のなかからロンドンにもってくることができるとしよう。この場合，一方は他方の自然価格である」(2)。「私はいう，1人の人の銀は他の人の穀物と同一価値に評価されねばならない」(3)。かくてペティにおいては，商品価値のもとに共通な人間労働が想定され，その量は労働時間で測られた。しかし，一方でペティは，「すべての物は，二つの自然的単位名称，すなわち土地および労働によって価値づけられねばならない……すなわち，われわれは一隻の船または一枚の上衣が，これこれの数量の土地，ならびにこれこれ

の数量の労働に値いすると言わねばならない。そのわけは，船も上衣も，ともに土地およびそれに投ぜられた人間の労働の創造物であるからである。このことは真実であるから，土地と労働とのあいだに一つの自然的等価関係を発見しうるならば，われわれはさぞうれしいであろう。もしそうなるならば，われわれは土地と労働のいずれか一方のみで……価値を表現するようになる……(4)」とのべていた。そして，その「自然的等価関係」発見の試みはあまり成功していない。これは，ペティが特定の誰かの区別ない人間労働を認めたものの，具体的有用労働と抽象的人間的労働との区別をみることができなかったことに由来する困難であったといえよう。

スミスやリカードーは，使用価値と交換価値の区別を確定していたので，ペティのような困難にぶつかってはいないが，「あらゆる必需品および便益品」を商品として確定せず，したがってマルクスのように「商品はさしあたり，その諸属性によって人間の何らかの種類の欲望を充たすところの一つの外的対象・一つの物・である」，という把握をしていないので，対象化された物質化された人間的労働という把握はなかった。さらに，労働はスミスにおいて，一方においては「すべての国民の年々の労働は……必需品と便益品とを供給する資源」である，との「国富論」冒頭の一句にみられるように，客観的なものと把握されているが，他方においては「労役と苦心」といった主観的な把握もなされていたのであった。

さて，次に，ベーム・バヴェルクのなした蒸留法批判を振りかえってみよう。ベーム・バヴェルクはいう，「二つの物の交換のなかに『同等性』があらわれるはずだという第一の前提にしてからが，私にはきわめて時代おくれなものにみえる……同等性と完全な均衡がえられるところでは，釣り合いのとれた状態を乱す変化は起きないのが普通である。それゆえに，交換がおこなわれる場合に商品の所有上の変更をもって事柄が終結するものならば，このことはむしろそうした変更をつくり出すなんらかの不等性もしくは偏在性が存在することを示している」(5)，と。ベーム・バヴェルクがいいたいこと，すなわち，主観的価値評価の差の存在が交換をひきおこすこと，は理解

されるとしても，いわゆる蒸留法の批判としてみたとき，次のことが指摘されなくてはならない。二つの商品の交換の方程式のなかには，同等性ばかりでなく「不等性」も示されている。しかし，不等なのは両項の使用価値であり，同等なのは両項の交換価値である。もし，使用価値と交換価値の統一物としての商品をみとめるならば，それをみとめなくてはならぬし，同等性の中に交換価値の本体を求めることもみとめなくてはならない。また，マルクス自身，交換価値の本体とその現象形態とを吟味したのちに，商品を再び使用価値と交換価値の統一物としてその総体において，したがって，また諸商品との相互関連において分析する「交換過程論」においては，商品がその所有者にとって非使用価値とされるゆえに交換が現実におこなわれる姿が追跡されたのであった。

また，ベーム・バヴェルクはいう，マルクスは最後に「労働生産物という属性」だけをのこすが，労働生産物以外の商品を最初から排除している。「労働生産物ではないが，ほんらい交換性をそなえているいっさいの交換しうるものをあらかじめ除去しておいて，一群のものに共通な属性として労働生産物であるという属性をみごとに蒸留して抽出してくる，その幼稚な手品に」読者は失笑を禁じえないであろう，と(6)。この批判に対しては次のことがいわれなくてはならない。いわれる蒸留法の最大の成果は「労働生産物」を残したことではないのであって，抽象的人間的労働の凝固物をのこしたことにあるのである。その点で批判は的をはずしている。また，労働生産物でもあるような商品をのみ当面の分析の対象としたことについては，その当否は世界史とともに長い商品史における労働生産物商品の位置と，「尨大な商品の集聚」における労働生産物商品の位置とに照らして考えられなくてはならない。商品世界の中核をなす商品が労働生産物であるならば，それを分析することに方法的誤りをいうわけにはゆかない。

さらに，ベーム・バヴェルクはいう，使用価値を捨象しても，「交換しうるすべての財貨には，需要にくらべて希少であるというような属性もまた残ってはいないだろうか？　あるいは需要と供給の対象だという属性は？　も

しくは占有されているという属性は？　または自然生産物だという属性は？」(7)，と。この批判にたいしては次のようにいわなくてはならない。いま分析の対象になっているのは商品である。商品は使用価値と交換価値の統一物であって，それ以上の何ものも含まないのである。需要にくらべて希少であるという性質は，その需要が特定のもの，つまり，この商品の使用価値への需要であるならば，使用価値の捨象とともに意味をもたなくなる。需要，供給の対象であるということは何を意味するか分明ではないが，かりに何らか社会的欲望を満たすものであるとの意なら，使用価値の捨象とともに消えるし，かりにまた，商品交換の対象となるという意なら，交換価値を言いかえたにすぎず，交換価値の実体を探ろうとしているときに，それは交換価値である，といったところで答えにはならない。占有されている財貨は何も商品にはかぎらないから，交換価値の本体をそこにもとめることはできないばかりか，何を占有しているのかと問われれば，再び，その使用価値を占有しているのかあるいはその商品価値を占有しているのかの区別があらわれ，問題はもとにもどる。「自然生産物」であること，すなわち「自然的な素材と労働という二つの要素の結合物」であるとの属性は，まさに使用価値そのものであり，具体的有用労働とともにそれはすでに消去されている。使用価値を捨象すると，ベーム・バヴェルクのいうようなものは残らないのである。

ベーム・バヴェルクが自らのいわゆる蒸留法の論理をフオローできなかったのは，使用価値と交換価値の統一物としての商品と，有用にしてすなわち効用をもち，かつ希少なものとしての経済財との区別が明瞭でなかったこととあわせて，マルクスのいう使用価値と自らのいわゆる効用との区別を明瞭にしていなかったからである。スミスやリカードーにあっては，たしかにその区別は未だはっきり確定されてはいなかった。リカードーはアダム・スミスを引用しつつ次のように著書の冒頭にのべている。「『価値なる語は二つの異なる意義を有して，ある時はある特定物の利用（効用）を言い現わし，ある時はその物の所有によって取得する，他貨物購買の力を言い現わす』ことは，既にアダム・スミスの着目した所である。『一はこれを使用上の価値，

他はこれを交換上の価値と称し得べきものである』[8]と。

これに対してマルクスはのべる，「ある物の有用性は，その物を使用価値たらしめる。ところが，この有用性は空中に浮んではいない。それは商品体の諸属性によって条件づけられており，商品体なしに実存しない。だから鉄・小麦・ダイヤモンドなどのごとき商品体そのものが，一つの使用価値または財である」と。有用性すなわち使用価値なのではない。有用性をもつ商品体そのものが使用価値なのである。この点は，ベーム・バヴェルクと論争したヒルファーディングにおいても充分に明らかであったとはいえない。効用から交換価値を説明しようとするベーム・バヴェルクを論難しようとしながらも，ヒルファーディングは論敵にひきよせられ，「使用価値はある物とある人間との個人的関係である」[9]と，のべているのである。

ヘンリー・ジェヴォンスは，古典派経済学の中で用いられ，やがてマルクスによって商品と置き換えられていった貨物という語を積極的に放棄した。すなわち曰く，「貨物なる語はもと抽象的の語にして人間の役に立つ物の性質を意味せしが，漸次混同せられ……具体的意味を有するに至りしを以て，今日この語はこのまま……別に利用なる名辞をもって吾人に役立つ物の抽象的性質を表示するを可とす」[10]，と。さらに，この有用性を意味する語は変形して次のごとくされる。「抑々利用は物の性質なれども，物に固着の性質には非ず，寧ろ物と人間の要求との関係より生ずる物の状態なりというを可とす」[11]，と。

かようにして，貨物は商品となり，効用と区別されぬ使用価値は商品体そのものとしての使用価値となった。そのときは交換価値は商品の魂の現象とされ，魂そのものは単なる投下労働から抽象的人間労働の凝固物としての商品価値となったのである。その一方で貨物は経済財となり，使用価値は効用となり，交換価値は限界効用となって行ったのであった。商品を対象としてみること，およびとりわけ外的対象物としての商品を最初の分析対象とすることは，資本制生産様式をとりわけ歴史的性格をもつものとして研究しようとすることであり，またその物質的基礎において研究しようとすることであ

る。いわゆる蒸留法はこの態度と結びついている。ジェヴォンスのあとをうけてアルフレッド・マーシャルは，「人間が物質的の物品を生産するといわるる如き場合においては，この人間は実はただ，有用なる結果，すなわち『効用』を生産するものに過ぎない」(12)，とのべた。ここでは，社会生活の基礎としての物的生産への特別の関心が消えうせたことと，特殊歴史的性格をもつところの商品生産への自覚的関心も消えうせていることが，ともにみとめられるであろう。

ともあれ，商品価値の質的規定性が，抽象的人間的労働の凝固物として与えられるならば，その量的規定性は，そうした性質をもつ労働の量として，比較的容易に与えられることになる。「社会的必要労働時間」とは，抽象的人間的労働の量的側面であるといってよいであろう。商品が，社会の富としてある「尨大な商品集聚」の一可除部分である以上，「諸価値の実体をなす労働は……同じ人間的労働力の支出である。商品世界の諸価値で表示される社会の総労働力は……一個同一の人間的労働力として意義をもつ」のである。ただし，総労働力を構成する個人的労働力は，同じく商品を生産することにおいて同一の労働力なのであるから，「一商品の生産において平均的に必要な，または社会的に必要な労働時間を要するにすぎぬ限りには，他と同じ人間的労働力である」。であるから，具体的な各個別労働力の支出は，標準的生産条件と労働の熟練・強度の平均度のもとにおける労働力支出という尺度によって換算されてのみ他と同じ人間的労働力の支出でありうることになるのである。

商品価値の量的規定性についてのベーム・バヴェルクの批判の中心は，複雑労働と簡単労働との関係についての論理の指摘である。マルクスが前者の後者への還元の尺度をはっきり示さなかったことをのべたベーム・バヴェルクは，彫刻家の一日の労働を要した彫像と石割人夫の五日の労働を要した荷車一台の石が交換されるといった例を想定しつついう，「彫刻家の労働の中には，すこしも『不熟練労働』が体化されていないし，いわんや石割人夫の五日の労働におけるのとひとしい量の不熟練労働はなおさら体化されてはい

ない……二つの生産物が相異なった種類の労働を相異なった分量において体化しているということは，わかり切った真理である。……これは，マルクスが要求し，また主張せざるをえない事実，すなわちそれらの生産物が同一種類の労働を，ひとしい分量において体化しているという条件とは，まったく矛盾する」(13)，と。複雑労働の簡単労働への還元の問題については，別の機会(14)に私見をのべてあるので，その特殊問題はここでは触れないが，「相異なった労働を相異なった分量において体化している」という「わかり切った真理」とは，具体的有用労働と使用価値の問題なのであって，ここで問題となっていることは抽象的人間的労働の量的側面なのであることが再度指摘されなくてはならないのである。

労働の二重性に対するベーム・バヴェルクの軽視は一貫したものである。使用価値の捨象によって残ったものが「労働生産物という属性」であるとマルクスが考えていたかのように見たてた批判もそうであったが，次の一文もまた同じである。「使用価値が机として，家として，または紡糸として質的に相異なるように，労働もまた指物師の労働として，建築師の労働として，または紡績労働として質的に異なっている。そして相異なる種類の労働をその分量によって比較することができるのとまったく同様に，相異なる種類の使用価値をその使用価値の大きさによって比較することもできる」(15)。ベーム・バヴェルクはこうして，マルクスの見解の支持者に自分の効用可測論をみとめさせようとする。しかし，相異なる種類の労働，すなわち具体的有用的労働を相互に比較する論理は，マルクスの中にはないのである。比較し，同等にしえたことは，質的に共通するもののあることなのであり，それは抽象的人間的労働だ，というのがいわんとするところなのである。バヴェルク自身が，諸使用価値を量的に比較しうるものとするために，満足させうる欲望の強さとして，共通の効用という質的規定に想定していたのではなかったろうか。

(1) アリーストレス「ニコマコス倫理学」河出世界の大思想版，109～110頁。
(2) ウイリアム・ペテイ「租税貢納論」岩波文庫，89頁。
(3) 同　　上，77頁。
(4) 同　　上，79頁。
(5) ポール・スウイージー編，玉野井，石垣訳「論争マルクス経済学」，94頁。
(6) 同　　上，99頁。
(6) 同　　上，101～102頁。
(8) リカアドオ，小泉信三訳「経済学及課税之原理」，岩波文庫，7頁。
(9) ポール・スウイージー編，前掲書，161頁。
(10) ヘンリー・ジェヴォンス，小泉信三訳「経済学純理」，41頁。
(11) 同　　上，46～47頁。
(12) アルフレッド・マーシャル，戸田正雄訳「経済学入門」，52頁。
(13) ポール・スウイージー編，前掲書，109頁。
(14) 拙稿「複雑労働の簡単労働への還元の問題に関する一試論」，「経済評論」昭和37年6月号。
(15) ポール・スウイージー編，前掲書，103頁。 ベーム・バヴェルク，竹原八郎訳「マルクス学説体系の終焉」，124頁。

Ⅲ 「効用価値説」について

「効用価値説」は，限界効用説として再生するずっと以前からその系譜の長さを誇っているものと考えられる。アリーストテレスは，一方では使用上の用と交換品としての用を区別しながらも，他方では「この術（交換術――荒又）は最初には自然に合致した事情から，すなわち人間たちがあるものは充分以上にもち，あるものは充分以下にもっているという事情から起こったものである」，とのべて交換価値の使用価値からの独立を否定し，商人を批判して，「ある人々は富をしばしば貨幣の総量だとなしている。……この種の取財術から生ずる富には限りがない」が，こうした富は本当のものではない，と(1)主張している。また，同じくアリーストテレスは，交易的共同関係は「物品が何らかの仕方で均等なものでないならば不可能であろう」としながらも，他方では，「自分に属する以上を得ることが利得といわれ，最初自分に属していたよりも少なくしか得ないのが損害といわれている。だからし

て『正』とはここでは……事前と事後との均等性を保守することにほかならない。……交易的な性質の共同関係においては，このような『正』がその楔となっていることはあらそえない。ただしそれも比例に基づくところの応報的な『正』なのであって，単純な均等性に即してのそれではない」とのべ，さらに，この場合「あらゆるものがある一つのものによって計量されることを要するのである。この一つのものとは……あらゆるものの場合を包含する需要にほかならない」(2)，としているのである。

アダム・スミスの「国富論」とならんで同年に出版されたコンディヤックの「商業と政府」の中にも，「商品交換では等しい価値が等しい価値と交換されるというのは，まちがいである。逆である。二人の契約当事者はどちらにもつねにより小さい価値をより大きい価値と，引換えに与えるのである。……諸物の価値は，ただ単に，それらの物がわれわれの欲望にたいしてもつ関係にある。……われわれは，われわれに必要な物を手に入れるために，われわれに無用な物を手ばなそうとする。われわれは，より多くのものと引き換えにより少ないものを与えようとする」，と書かれていたのであった。(3)

こうした考え方に対する基本的批判は，使用価値と交換価値の異質性を次の二つの面から指摘することであったと考えられる。すなわち，その一つの面とは，先に触れたように，アダム・スミスが水とダイヤモンドの例を引いて，使用価値の大小と交換価値の大小は照応しないから，二つのものは別である，との論証，さらにそれをうけた，使用価値はその商品の歴史的社会的性格を示すものではない，とする論証とである。そしていま一つの面とは，使用価値と交換価値の区別は，商品の発展のなかで，歴史的現実として確定した，とする指摘である。マルクスはのべている「コンディヤックは，使用価値と交換価値とを混同しているだけではなく，まったく子供じみたやり方で，発達した商品生産のおこなわれる社会とすりかえて，生産者が自分の生活手段を自分で生産して，ただ自分の欲望を越える超過分，余剰だけを流通に投ずるという状態をもち出しているのである。それにもかかわらず，コンディヤックの議論は，しばしば近代の経済学者たちにあってもくり返されて

いる」と。

「効用価値説」の再建のためには，何よりもまず，アダム・スミスの立てた問題をアダム・スミスとは別様に解いてみせなくてはならなかった。そして，周知のごとく，「財の価値はその財の限界効用の大小によって決定される」，という命題がたてられた。ベーム・バヴェルクはのべている，「この命題がわれわれの価値学説の眼目である。その後の一切の問題はこの原則に基づき，それによって導き出される。同時にこの原則にわれわれの代表する学説と従来の学説との論争点が現われるのである」，と(4)。同時に，限界効用概念の確立とともに，旧来の使用価値概念からの効用概念の分離が進んだ。その点についてのシェヴォンスの見解は先に触れたが，マルクス批判においてはマルクスの使用価値概念に自己の効用概念を投影させたベーム・バヴェルクも，自説の積極的展開のなかでは，次のようにのべている。すなわち，「最大の効用を有するものが同時に最小の価値しか持たないとは，何たる奇怪な矛盾であらうか？　勿論人々は効用と『使用価値』とを混同して，事実を精密に認識し，正確な名称をつけることができなかったのである。誤って鉄に高い『使用価値』を，ダイヤモンドに低い『使用価値』を認めること」(5)になったのである，と。

しかし，限界革命の始祖たちの理論は，マルクスによって指摘された第二の面についての自覚に充分であったとはいえない。1920年前後にあいついで現われたブハーリンのベーム・バヴェルク批判とハインドマンのジェヴォンス批判は，ともにその点を重要攻撃目標としたのであった。すなわち，農耕民族と牧畜民族の交換を思わせるジェヴォンスの例解に対して，ハインドマンは，「一体，交換界に上場されるものは，生産者自身の欲望満足に当てられた後の剰余生産物ばかりではない。また交換のための生産は一社会のある部分の目的とするところで，他の部分は使用のための生産を目的にするものだと説くのは誤謬である。総ての財貨は，世界市場上における交換を目的として生産される。そして多くの場合において，生産された財貨はそれらを生産した人々にとっては何等の効用もないのである」(6)，と。また，ベーム・

バヴェルクの馬市の例解に対してブハーリンは「自然経済から資本家的経済への転化過程の内に三つの段階を区別し」，第1が剰余のみ交換する段階，第2は自家消費分も少量生産する段階，第3は市場めあてに大量生産し，自家消費分などゼロになる段階であるとし，今やこの最後の段階であって，「効用に基づく財の評価の，完全な欠如こそ……特徴をなすものである」(7)，と主張した。

もちろん，ベーム・バヴェルクもこの第3段階のごときところでは生産物は生産者にとってほとんど効用なきものであることをみとめざるをえない。ブハーリンはさらに追撃し，「それは『ほとんど』ではなくて，ゼロに等しいのだ」(8)，とするが，メンガーやベーム・バヴェルクの立場にあってブハーリンに反批判を加えるレオ・ケッペルは，意外なところから立ちあらわれる。すなわち，「三つのすべての『段階』において経済主体が支配される唯一の動機は，最大可能の総効用の追求の努力である。経済主体は効用を追求し価値を追求するものではない——それはただ後者によって方向づけられるにすぎない。価値は人間の経済行為の動機ではなく，その規制者である」(9)。「それゆえに，主体の経済行為の動機は『自然経済の資本主義的商品経済への発展』途上においても変化することはない」(10)。「『単なる生産物』と『商品』との厳重な区別はマルクス主義にとっては大きな意義を持っていても，限界効用説に対しては持っていないのであり，ブハーリンがマルクス的概念ならびに区別を限界効用説の中に移入する場合，彼はその批判の内在性を掌中から落すの危険にある」(11)。研究対象は，商品経済一般よりも，さらに一歩抽象的なものにうつっているということになる。

商品経済一般よりも，さらに一歩抽象的なもの，とはなにか。それについて知るために，まず，ブハーリンによるベーム・バヴェルク批判のいま一つの論点を聞こう。ブハーリンはいう。オーストリー学派の「分析の出発点をなすものは，他の人間との社会関係にあるところの，与えられた社会の個々の成員ではなくして，孤立的『原子』，すなわち経済的なロビンソン・クルーソーである」。「この立場は，古くかつ尊敬に価するものだとはいえ，し

かもそれは絶対的に誤謬である。社会は，……孤立せる個人の算術的合計ではない。反対に，各個人の経済的活動は，一定の社会的環境……を前提している」。「同学派が少しでもなんらか社会的現象を導出せんと試みるや否や，それが，不可避的に，その『社会的原子』の個人的動機の中に，『社会的なもの』を密輸入せざるをえざるに至ることは明らかだ」(12)。これに対してケッペルは反批判する。われわれは社会を孤立した個人の算術的合計と思ったことはないから，あとで密輸入することもない，と。「国民経済は，それが分業の別あるがゆえに諸機関の一体制，一『有機体』である。社会的分業は，ここに観察を加えんとする組織である」(13)。そしてさらに，経済学の対象は商品経済のみであるとするブハーリンを批判していう，「限界効用説は，かかる『組織化された』経済においても少なくとも『単純な経済』の問題が存することを示すものである。単純経済の理論とは即ち『経済の存するところには——たとえ社会組織や権力分布なる具体的状態が如何に変化するとも——常に至るところの内的相互関連を持つ，諸合法則性の，その一体系』である。社会組織や権力の分布などの具体的形態によって変更させられるところのものは経済法則にあらずして，その具体的作用である」(14)（『 』はハンス・マイヤーからの引用）とのべているのである。

ケッペルにおいては，しかし，社会的分業と商品経済とが，その区別と同一において吟味されているわけではない。現実には，「経済主体の無数の，個人的利得を追求する努力の，期図されざりし結果」としての国民経済が，分析対象として表象されており，「無制限の全活動力ある相互的競争」，「所有する財貨に対する自由なる支配権と，その支配権の自由なる転換の可能性」を前提として論議がなされている(15)，のである。これは，独占資本主義以前の商品経済の，他のなにものにも制約されていない姿であり，社会的分業一般ではない。したがってやはり，社会の目的は総効用だといっただけではすまない，富のブルジョア的形態の問題をどうするか，が問われねばならない。とはいえ，ここでは，少なくとも「他人のための使用価値」の問題は社会的分業から出てくる問題としてあるのであって，「たんなる使用価値と

関連するかぎりでの効用は，つまり個人的消費にもとづく効用は経済学の範囲外に追放される」(16)，といった批判では不足であろう。

マルクスにおいては，分析すべく表象に与えられるのは富のブルジョア的形態としての「尨大な商品集聚」であった。これはその使用価値面からみると，無数の諸使用価値のあつまりであり，それは，とりもなおさず社会的分業のブルジョア的な現象であった。商品の二要因の分析から，抽象的人間的労働と具体的有用的労働があきらかとなった。前者は単に人間の生理的エネルギーの支出として，後者は，土地および土地よりえられたものにある形態転化を起させるための，具体的に規定された形での，しかしそれ自身一自然力としての労働力の支出であった。ともに自然の中に質料的基盤をもったものとして把握され，具体的有用的労働の各ブロックは，まさに社会的分業の各部門を体現するものであった。しかし，使用価値を効用にかえた理論は，アダム・スミスの中にあった労働の主観的把握，すなわち犠牲，あるいは労役と苦心といった把握をうけつぎ発展させて，労働を，快楽の対極としての苦痛，あるいはマイナスの効用にかえてしまった。社会的分業の理論的把握への道は，むしろ困難をましたといってよいのではあるまいか。

効用ないし「主観的使用価値」から「客観的交換価値」にいたるみちすじは，ジェヴオンスによっても，ベーム・バヴェルクによってもなされた。なかでも，ベーム・バヴェルクは，「孤立的交換」においては，各「主観的価値」の差から交換の必然性は証明できても，市場価格のきまる点は定められず，ただ巾があるにすぎないことを明らかにした。市場価格が一点に定まるためには，交換の両当事者側がそれぞれ無数に多く必要であり，かつ，それぞれのもつ「主観的価値」が無限小の差をもって連続的にならんでいることが必要であった。しかも一方で，「主観的価値」はなぜに貨幣をもって測りうるのか，そもそも効用は可測的であるといえるのか，の問題も起った。この点も，限界効用説批判の攻撃点の一つとなった。ブハーリンはいう，「価値決定方法は一定の価値尺度を前提とする。事実，価値の大きさは測定の結果である。しかもそれは一定の計量単位を前提する。ベーム・バヴエルクに

おいて，この計量単位はどこに成立するか。ここに至って，オーストリア学派が今日まで未だ克服せず，また遂に克服しないであろうところの，非常に大きな困難に遭遇する」(17)。

これは，ベーム・バヴエルク自身が苦しんだところであるとみられる。「人は吾々を難じていう。幸福，利得の大いさは，感情は測定不可能であるから計算されえないと。われわれはこれに抗弁して，それは間違っていようと正しかろうと，事実計算されていることを論証する」，「われわれはAなる快感は例えばBなる快感の3倍の強大さであると判断することができるか。私は信ずる，事実それは可能である，あるいはそれに酷似したことが可能であると」(18)。しかし，すでにケッペルは，反批判の中でいう，「財貨の意義は測定されるのではなくて段階つげられるのであり，順列に斉らされるのである。だから，財貨Xに依存する欲望充足は財貨Yに依存する欲望充足の前にくるがゆえに，財貨Xの価値は財貨Yの価値より大であるということはできるが，財貨Xの価値はこれこれの大きさであり，その『大きさ』がこれだけ，あるいはあれだけということはできない」(19)，と。いうまでもなくこれはいわゆる基数主義から序数主義への推移の一断面である。ヒックスは，序数主義の考え方をつよくうち出している。

これに対して，ブリューミンは，ブルジョア経済学者が効用の可測性のドグマをすてたのは「経済的諸問題のより合理的な解釈への転換を示す積極的兆候と考えることができる」とのべつつ，しかしまた，ヒックスはなお「主観的価値論の遺物を……より慎重，かつあいまいな定式をもち出して救済しようとしている」と批判している(20)。また，わが関恒義教授も。「ヒックスによって否定されたものはたんに効用の可測性，つまり効用の基数的性格だけであり，効用の大小相等など，つまり効用の序数的な性格はいぜんとして前提されているわけである」(21)，と批判している。

このような批判に加えて，次のような側面からの検討も必要ではなかろうか。すなわち，効用ないし選好という概念にもとづく分析は，社会的分業を把握するにおいてどのように有効であり，どのような限度があるのかという

側面である。効用が選好にとってかわってゆくことの中には，商品価値の本体の吟味からはなれて交換価値の次元のみでの均衡論的分析にうつってゆく傾向があらわれていると思われるが，それとともに，基数から序数への転移の中には，質と区別されたという意味での純粋な量から，なにごとか質を潜在させた量への転移があらわれていると思はれるからである。さらにまた，次にみるような需要供給説との関連も考えなくてはならない。

ジエヴオンス批判においてハインドマンは，ローダーデイルの次のような定式，すなわち財貨存在量が大であれば価値小，反対に財貨存在量が小であれば価格大となり，また財貨需要量が大であれば価格大，反対に財貨需要量が小であれば価格小となるとの定式を読者に想起させつつ，ジエヴオンスの説は「古い需要供給説の焼直しにすぎない」(22)，としていた。ブハーリンも同じように，欲求が大きいほど，また財が少ないほど，限界効用は大きいという関係は，需要供給法則の説明以外のなにものでもない，と批判していた。ところがケツペルはブハーリンへの反批判において，ブハーリンは「昔から知られた『需要供給』なる合言葉とこの事実の説明および需給の法則の解釈とを混同している」，とのべたのであった(23)。

こうした喰いちがいも，実はかなりの系譜をもつと考えられる。アダム・スミスは，「国富論」第1篇第7章において自然価格および市場価格を論じて，商品を市場にもってくるのに支払われねばならない「地代と労働と利潤との全価値」と同額の価格を自然価格とし，うられるじっさいの価格を市場価格であるとする。そして，「地代と労働と利潤との全価値を支払う意志のある人々の需要」を有効需要とする。そして，じっさいに市場にもってこられた商品の量にくらべて有効需要が多いならば，買手の競争が激化して市場価格は自然価格を上まわり，反対に商品の量にくらべて有効需要が少ないならば，売手の競争が激化して市場価格は自然価格を下まわる。そして，市場にもたらされる量は有効需要にひきつけられて増減し，したがって自然価格はいわば中心価格となる，と説明しているのである(24)。この分析の特徴は，市場価格より先に，自然価格と有効需要とが決定されている点にある。さて，

同じアダム・スミスは「国富論」第4篇第2章では次のようにのべて自由競争と国内産業を弁護している。「彼の資本を国内産業活動の支持に使う個人は皆，必ず，その活動を，その生産物が最大の価値をもつような方向にむけようと努める。産業の生産物とは，対象または原料として使われるものに対してその産業が付加するものをいう。この生産物の価値が大きくなったり小さくなったりするに従って雇主の利潤に大小が生ずる」。「一つの社会の年々の収入は，常にその産業活動の年々の全生産物の交換価値に正確に等しい，否，正にその交換価値そのものである。……各人が彼の資本をなるべく多く国内産業に用い，かつまたその産業をしてその生産物が最大価値を実現するように導くにつとめるならば，各人はそれによって必然に社会の収入に対して彼の最善を尽したことになるのである」(25)，と。この有名な「見えざる手」についての論議のなかでは，アダム・スミスは，社会的分業の各部門間での資本の流出入をつうじての社会の「収入」の変化すなわち，総「交換価値」の変化を念頭においている。

ロバート・マルサスにおいては，スミスの分析の第1の側面にみられた自然価格と購買されるべき商品量としての需要とを前提する考え方はなくなった。「ある特定の貨物に対する需要とは，それを購買する能力と結びついた意志である……この意志と能力の程度（範囲と訳されていることもある――荒又）が大きければ大きいほど，それに対する需要はいよいよ大きくなり，またはいよいよ熾烈である」(26)。「価格をひきあげるものは，明らかに，たんに現実の需要の程度（範囲）ではなく，また現実の供給と比較しての現実の需要の程度（範囲）でさえもなく，ある現実の生産物を平和のうちに分割するか，または同じ種類の将来の生産物が不足するのを防ぐために，より大きな需要の強度の表現を必要とさせるような需要と供給とのあいだの比例の変化である」(27)。さらに，ベーム・バヴェルクは，馬市の例解をもって，市場価格が，総供給と総需要との中から相互に量的に一致する有効な需要と供給を分離することを効用概念を利用しつつ説明したのであった。スミスの分析の第2の側面についてみれば，限界効用説の有力化とともに，スミスのいわ

ゆる「社会の収入」は総「交換価値」ではなく総効用とかえられてゆく。このようにして，資源を最適に利用させるメカニズムとしての価格機構が説明されることになったのである。つまり，社会的分業は，価格機構をつうじてもっともよく組織される，ということになる。

こうした考え方に立って，すでにベーム・バヴエルクはそのマルクス批判において，この点についても論及していた。バヴエルクはいう，マルクスは「需要と供給とは，それがたがいに均衡するとき作用しなくなる」というが，交換の目的を達した部分については，いつも需要は供給に一致しているのではないか，と。「商品がその正常的市場価値で売られる場合には需要と供給とがある意味でたがいに均衡しなければならないということ，いいかえると，この価格で供給される商品とちょうどひとしい量の商品が，有効に需要されるということは，まったく正しい。しかし，このことはたんに商品が通常的市場価値で売られる場合にだけいえるのではなく，商品が売られるさいのどんな市場価値についても，さまざまな変則的市場価格の場合にさえもいえることである」(28)，と。マルクスの考え方が，スミスの分析の第1の側面の系譜をひいており，第2の側面の批判的継承については十分に展開されていないことが明らかである以上，ハインドマンやブハーリンの批判は，その点ではベーム・バヴエルクに対する十分の反批判になっていなかったのだ，といわねばならない。

(1) アリーストテレス「政治学」，前掲書，52～54頁。
(2) アリーストテレス「ニコマコス倫理学」，前掲書，107～109頁。
(3) 関恒義「現代資本主義と経済理論」，188頁から引用。
(4) ベーム・バヴェルク「経済的財価値の基礎理論」，長守善訳，岩波文庫，55頁。
(5) 同　上，41頁。
(6) ハインドマン，上原咲平訳「社会主義経済学」，303頁。
(7) ブハーリン，小林良正訳「金利生活者の経済学」，122～123頁。
(8) 同　上，125頁。
(9) レオ・ケッペル，藤田清訳「限界効用説とマルクス主義」，86頁。
(10) 同　上，87頁。

(11) 同　　上，96頁。
(12) ブハーリン，前掲書，66～72頁。
(13) ケッペル，前掲書，40～41頁。
(14) 同　　上，46～47頁。
(15) 同　　上，32頁，51頁。
(16) 関恒義，前掲書，189頁。
(17) ブハーリン，前掲書，134頁。
(18) 波多野鼎「価値学説史第2巻」，188～189頁。
(19) ケッペル，前掲書，114頁。
(20) ブリューミン，平館，宮崎訳「近代経済学の再検討」上巻，131頁。
(21) 関恒義，前掲書，212頁。
(22) ハインドマン，前掲書，328頁，332頁。
(23) ケッペル，前掲書，182頁。
(24) アダム・スミス，前掲書，(1)　115頁以下
(25) 同　　上，(3)，51頁。
(26) ロバート・マルサス，小林訳「経済学原理」上，岩波文庫，98頁。
(27) 同　　上，103頁。
(28) ポール・スウイージー編，前掲書，121～122頁。

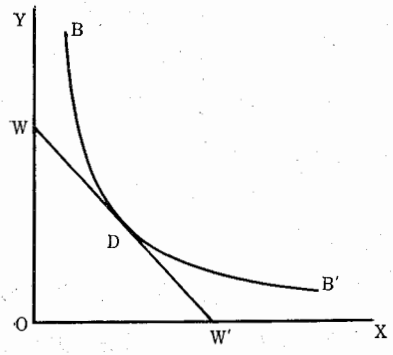
Ⅳ　社会的分業と市場価格

すでに触れたように，「尨大な商品集聚」は，その使用価値の側面についてみれば，相異なる種類の諸使用価値の総体であり，そこに社会的分業が現象しているのであった。また，商品はまず使用価値でなければならないが，それは単なる使用価値であるにはとどまらず他人のための使用価値でなくてはならなかったが，これもまた，商品生産が社会的分業の一形態としてのみありうることを示すものであった。生産者たちは社会的分業の中で自らの労働を「一方では一定の有用的諸労働として一定の社会的欲望を充たし，かくして，総労働の・社会的分業の自然発生的体制の・諸環たる実を示さなければならぬ。それらは他方では……他の種類の有用的私的労働のそれぞれと交換可能であり，かくしてこれと同等な意義をもつ」(1)ものとしなくてはならないのであった。商品はもともと使用価値と交換価値の統一物であったが，

交換価値の本体の分析はあくまでも使用価値を捨象することによってなされた。とはいえ，交換過程の分析では，使用価値と交換価値の統一物としての現実的商品とあつまりを対象としなくてはならなかったし，再生産表式の研究においても，使用価値に媒介された。一般に，商品生産がいかようにして社会的分業を組織するかという問題に触れるときには，つねに使用価値の側面も重視されなくてはならない。

いわゆる「消費者需要の理論」は，社会的分業の縮図を吟味する，という意味においてはある程度理解されうるものとなる。すなわち，家計の総体が仮りに総生産，さらには国富であるとすると，平均家計の支出項目の種類とその支出の大いさは，社会的分業の縮図になる，ということである。この場合，各家計は，いわゆる経営と家計を総合した小商品生産者のそれでなくては，総生産物をおおうことはできないし，社会的分業を前提しているのであるから，職業を異にするにしたがって家計の内容は異なるであろうし，さらには，資本家的生産にあっては「企業」と「家計」の相異を考えねばならぬ，という難点が生ずるのである。これを解決しようとすれば，総販売量＝総購買量ととい過度の抽象におち入るか，反対に具体的な，産業・家計連関表になると考えられる。そのような難点をもつとはいえ，単なる商品生産者としての商品生産者を前提とし，第１図のような「所得＝消費曲線」と「収支線」とを読みかえて，社会的分業をＸ生産部門，Ｙ生産部門と大別してモデル化し，Ｘ軸とＹ軸に社会の総労働時間をもって産出しうるＸとＹの使用価値量をおくことにしよう。そうすると，無差別曲線$\overset{\frown}{BB'}$が$\overline{WW'}$線と接する点Ｄは，ありうるべき社会的分業のバランスを示す点となるであろう。また，この図を任意の二使用価値のありうるべきバランスを示すものとしても利用しうる。しかし，そのさいには，

第１図



$\overline{WW'}$線は，その二使用価値生産のみにむけられる総労働時間からその二使用価値にむけられる部分の増減に応じて変わりうる。無差別曲線の傾斜や曲率，あるいはマーシャル流にいえば需要の弾力性を表す数値などは，それぞれの使用価値に関する需要の微変化率を示す量そのものであるとともに，そうした属性をもつその曲線そのものは，他の曲線に対してはある全体，ある質をあらわすものであり，それは諸使用価値の体系としてあらわれる社会的分業全体の構造に規定され，その構造，大きな質的規定性，の部分というところから基礎づけられるものであろう。一定の生産力水準に規定された，一定の生活構造が，さらにその社会的分業を規定しているとみてよいであろう。

とはいえ，第1図を簡単に商品価値量で読みかえることには大いに反論があるであろう。価格は現実に測定しえても，価値は直接にそうはできないと。しかし，市場価格の研究は商品価値を出発点にしなくてはならない。「種々の商品の価格が最初にどんな仕方で相互に確定または規制されるかをとわず，価値法則が価格の運動を支配する。商品の生産に必要な労働時間が減少すれば，価格は下落する。その労働時間が増加すれば，他の事情が同等不変ならば，価格が騰貴する」(2)。マルクスはまた，マルサスを批判してのべている，「生産費，したがってまた価値における変動が，需要の変動，したがって需要供給の比率における変動を生ぜしめたのであり，また，需要におけるこの変動が供給におけるある変動を生ぜしめうるのである。……生産費の変動が需要供給の比率によって調整されるのでは決してなく，反対に，それ自身がこの比率を調整する」(3)，と。また，ブリューミンは次のようにのべている「『限界効用』説は逆立ちしている。実際，商品の相対的稀少性はその価値によって決定される。価値は，市場価格を通じて支払能力ある需要の大きさに影響し，この大きさに商品の社会的供給の規模が適応させられる。より高い価値をもつ商品は，周知のとおり，少量しか生産されない。この商品に対する需要が低いからである」(4)，と。

商品価値とそれにもとづく社会的分業の編成，したがって諸使用価値量のありうべきバランスを前提とし，そこから出発するならば，「需要と供給と

の関係は，一方では市場価値からの市場価格の背離を説明するにすぎず，他方では，この背離の止場・すなわち需要供給の関係の作用の止場・への傾向を説明するにすぎない」(5)。この問題の立て方は，先にみたアダム・スミスの第1の側面の系譜の中にあることはいうまでもない。同一部門での市場価値の成立と相異なる部門での生産価格の成立の問題(6)には触れずに先にすすもう。

さて，マルクスは次のようにのべている，「われわれが個々の商品だけを取り扱うかぎりは，われわれは，充足されるべき欲望の分量には立ち入ることなしに，この一定の商品に対する欲望が――価格のうちにはすでにその分量が含まれているのだが――現存するものと想定することができた。だが，一生産部門全体の生産物が一方の側に立ち，社会的欲望が他方の側に立てば，この分量が本質的契機となる」(7)，と。マルクスは，価格のうちに欲望の分量が含まれている，といっている。振子で引力を測るように価格表で快楽の強さを測りうるといったジエヴオンスや，欲望の強さ，効用の大きさは現に価格で測られているではないかといってベーム・バヴエルクの心情は，マルクスにも理解されうるところということになる。価値形態においては使用価値が商品価値の現象形態になったように，市場価格においてはそれが商品価値（市場価値および生産価格）からかい離する限りでは，その使用価値に対する社会的欲望の大きさを表わす現象形態となる，といってよいのではあるまいか。また，価値形態において使用価値が商品価値の現象形態となりうるのは，等価形態の位置におかれた商品もまたそれ自身価値物であったからであるが，市場価格が社会的欲望の大きさを表す現象形態になりうるのは，商品価値によって規定されるありうべき社会分業のバランスのもとでの，その使用価値生産にむけられるべき社会的必要労働時間総量と，現実に支出された労働時間総量とのかい離という商品価値量の次元での基礎をもつからである，といえるであろう。出発点において，価値の貨幣による表現と規定された価格は，より大きな内包をもつことになる。

とはいえ，ここで直ちに市場価格の「精確な」量的規定性が与えられると

も考えられない。すなわち，市場価格は，その使用価値生産のために，ありうべき社会的分業のもとで必要であったであろう社会的必要総労働時間を現実に生産された使用価値総数で除したもの，というわけにもゆくまい。各使用価値によって，「需要の弾力性」が異なった数値を示すのは経験的事実であるのでから。さりとて，もちろんそれを効用の可測性にもとづいて設定するわけにもゆかない。無差別曲線によって説明しても，その曲線の傾斜や曲率，あるいは「限界代替率」は，両軸におかれた使用価値の組み合わせ如何でさまざまであるし，さらには「収支線」の右上へのシフトに応じてつぎつぎにあらわれてくるこの，あるいはあの曲線は，むしろ相互に異質の生活構造を示すのである。商品価値からの市場価格のかい離は，ありうべき社会的分業の全体構造を前提し，その全体構造の現実的歪みを各部分で反映しているものであり，社会的分業の全体構造の各部分が等質ではないので，歪みにともなう力がさまざま異なって現われるのだ，ということであろう。

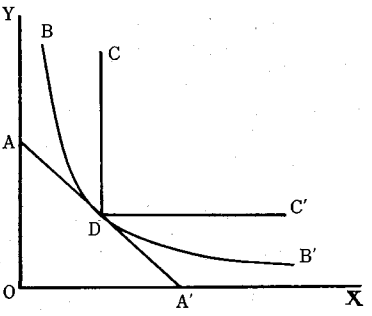
すでにみたように，アダム・スミスは，自然価格と，それを支払う意志のある有効需要とを前提し，議論を出発させた。ロバート・マルサスは，一方では自然価格という考え方を変質させながら，他方では需要を別様に規定した。すなわち，需要はその強さ，すなわちどれだけの価格をも支払う意志があるか，という側面と，その程度（あるいは範囲），すなわちどれだけの分量の使用価値を必要としているか，という側面との二面から規定された(8)。マルクスは，アダム・スミスから出発しながらも，これに留まってはいない。同時に，交換が成立した部分に関する限り，需要と供給はいつも一致しているではないか，といったベーム・バヴェルク流の議論にも入らない。マルクスはのべている，「需要供給の一般的な概念規定にさいしての本来的困難は，それが同義反復に帰着するかに見えることである。さしあたり供給を……考察しよう」。「労働の生産性の与えられた基礎上では，どの特殊的生産部門でも，一定分量の財貨を生産するには一定分量の社会的労働時間を要する，……社会はこの財貨を，社会が自由に処分しうる労働時間の一部分をこの財貨の生産に費すことによって購うのであり，したがって，この

与えられた社会が自由にしうる労働時間の一定分量によってこの財貨を購うのである。……ところが，一方では，ある社会的財貨に費やされる社会的労働の総分量，すなわち社会がその総労働力のうちこの財貨の生産に費す可除部分，つまりこの財貨の生産が総生産中で占める範囲と，他方では，社会がこの一定の財貨によって充たされる欲望の充足を要求する範囲との間には，必要的関連はなく偶然的な関連があるだけである」。であるから，「一定商品が当時の社会的欲望を超過する程度に生産されたとすれば，社会的労働時間の一部分が浪費されたのであって」，「これらの商品は市場価値以下で売りとばされねばならず，その一部分はまったく売れなくなることもありうる」。「他の側面，需要について考えてみよう。……さしあたり，需要の側に一定分量の社会的欲望――これに対して他の側に，種々の生産部門における一定分量の社会的生産が照応する―― を想定するかに見える」。「だから，需要の側に一定の社会的欲望の特定量があって，この欲望を充足するために市場におけるある財貨の一定分量が必要だ，というふうに見える。だが，この欲望の量的規定性はまったく弾力的であり動揺的である。欲望の固定性は仮象である」。生活手段が安くなるか貨幣賃銀が高くなるかすれば賃労働者はより多くの生活手段を買うであろうし，棉花が安くなればより多くの資本が綿業に投下されるであろう，(9)と。

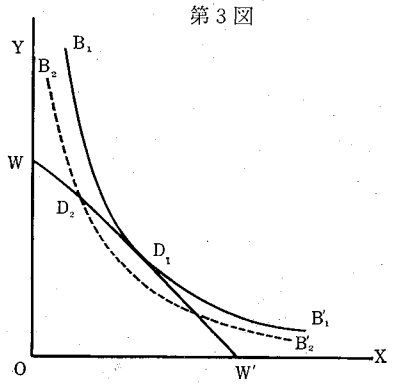
「生産が社会の現実の予定的統制下にある場合にのみ，社会は，一定財貨の生産に費やされる社会的労働時間の範囲とこの財貨によって充たされるべき社会的欲望の範囲との間の関連を創造する」(10)，のであって，社会的分業が自然発生的に組織される商品経済にあっては，その「関連」は，一生産部門からの他の生産部門への労働者のたえざる移動（資本制下では資本のたえざる移動）と，加えて市場価格によって調整される社会的欲望の範囲の伸縮とによって保障されるのである。弾力的な社会的欲望は，その弾力性によって社会的分業のありうるべき構造からの歪みを吸収しつつ，また社会的欲望は，可塑的ではなく弾力的であるその性質から，社会的分業がその歪みを修正するようにそこに力を加えるのである。こうした性質は，ヒックス流の無

差別曲線では不完全な代替性という考え方で表現されている。第2図にみるように，曲型的な「所得－消費曲線」は$\widehat{BB'}$のようなものである。もし線が$\overline{AA'}$のようなものであれば，XとYとの代替性は完全である。ということは，どちらでもよい，ということであって，そもそも社会的分業の問題はなくなる。どちらをどれだけ生産しようと全く同じことだからである。また，$\overline{CC'}$のようなものであれば，XとYとは全く代替性をもたない。$\widehat{BB'}$であってはじめて，原点に対して凸であるといういみで，社会的分業のありうるべきバランスを示しながらも，かつ，ある限度内では，不完全ではあるが社会的分業の歪みを弾力的に吸収するのである。不完全であるゆえんは，XとYとの生産量比率がD_1からD_2にずれたために，D_1は$\widehat{B_1B_1'}$線上にあったのにD_2は$\widehat{B_2B_2'}$線上につまり下位の線上に移ることになっているのである。（ただし，ここでも$\overline{WW'}$は商品価値量によって読みかえてある）。

第2図



第3図



かようにして，不完全な代替性ということは，市場価格の変動を媒介として社会的分業の一定限度までの歪みを一時的に吸収する社会的欲望の弾力性の別様の表現とみなしうる。社会的欲望は，固定的でないゆえをもって商品生産における社会的分業の安定性に貢献している。しかし，それとともに，まず第1に，この弾力性が一定の限度内でのみ有効なものであることに注意しなくてはならない。市場価格の変動がある限度を超えたとき，それは一般的な再生産過程の安定の条件をおびやかす。もともと「需要の弾力性」の小

さい中心的な生活必需品の価格の高騰は，労働者の限度を超えた生活苦をひきおこし「米騒動」のごときもの原因となるであろう。また，一般に商品の市場価格の限度を超えた下落は，生産された商品の使用価値の破棄を，さらには生産過程の停止，あるいは関連する生産手段の破棄をも伴うであろう。第2に，安定要因である代替性は，時として不安定要因としても作用しうる。個別的な生産者たちは，自らの生産部門の中で競争するのみならず，代替的な隣接部門とも社会的総需要のシエアをあらそうであろう。投機が，この相異なる部門入りまじっての競争を激化させ，ありうべき社会的分業のバランスからの歪みをつよめるであろう。第3に，各部門の生産者たちの間の競争は，やがて社会の平均的生活様式を変化させ，無差別曲線自身を変化させることもある。これは，出発点の社会的分業に生まれた歪みを追認するものであるとともに，あたらしく生まれた社会的分業のバランスをさらに変形させようとする力を鼓舞するであろう。第4に，商品価値を超える市場価格の高騰は，本来，生産高に対する社会的欲望量の相対的超過をいみするが，買い占めなどの市場価格操作は，投機による仮空の社会的欲望量を作り出すし，また，一定限度内で使用価値の品質のよし悪しは市場価格の差となってあらわれるが，意図的な高価格は幻想的な品質のよさをつくり出す。そのようにして，買い占めで価格の釣り上げられた中で，倉庫の野菜が腐敗したり，害にはならない程度の化粧品が礼々しく売買される。

社会的欲望の弾力性と結びついた市場価格の商品価値（あるいは市場価値ないし生産価格）からのかい離はいずれにしろ一時的である。このかい離は止揚されなくてはならない。マルクスはいう，「需要と供給とは，その不等によってもたらされる作用を極めて異なる形態で止揚しうる。たとえば需要が減少し，従って市場価格が下落すれば，資本が引き上げられて供給が減少される，ということが生じうる。また，必要労働時間を短縮させる諸発明によって市場価値そのものが低下し，かようにして市場価格と均等化されるということも生じうる」。逆に需要が増加すれば資本が供給されて生るが増加することもありうるし，「市場価値そのものが長かれ短かれの期間にわたり増大す

るということが生ずるかも知れない，というのは，この期間中は，要求された生産物の一部分が劣悪な条件のもとで生産されねばならぬからである」(11)。

市場価格の把握には，このように，一方では商品価値から，他方では社会的分業の全体から出発することが必要である。「効用価値説」において個人の「主観的使用価値」から「客観的交換価値」を導き出す試みがなされたが，「精確な」市場価格の理論的想定のためには一系列の諸個人がひきあいに出されねばならなかった。無差別曲線を利用する均衡論的接近においては，2財の相関という形で，最初から，やや「社会」的なものからの出発があるが，社会的分業の全体からひきはなした任意の2財から出発するのでは，商品はいまだ孤立的にあつかわれている。そして，いずれの道をとおっても，社会的分業一般と商品生産の区別と同一，社会的分業を調整する上での価格メカニズムの意義と限界はうきぼりにされないのである。もちろん，安易な経画「計済」が，高価に支払うことに似た買物行列による時間の浪費や，官僚の恣意と汚職，稀少な切符の流通などをひきおこすことはいうまでもない。しかし，価格のメカニズムも社会的分業の組織において限界をもつことは明らかであり，それは社会的分業一般と商品生産を区別することによって可能になるであろうし，それは経済財一般ではなく，就中，商品から出発することによって可能となるであろう。

発達した商品生産である資本家的生産においては，社会的欲望の弾力性ないし需要の構造の弾力性は，次の諸点ではかえって傾向的に小さくなるともみられる。第1に，生産物の商品性がつよまるにしたがって，諸使用価値の在荷はますます多く商品資本の形態をとるようになる。最終消費者のもとには，小単位による日々の購入が，使用料を支払っての賃借が普及する。商品資本の一形態としての在荷は，それが大きくなることは総資本の回転率を低め，利潤率を低めるという効果をもつから，たえず縮少されようとする。そうして，社会的労働とその生産物と，生産物の消費とは，ますます淵の少ない絶えざる流れの状態におかれる。これは，社会的分業により厳密な比例性を要求するであろう。第2に，社会的分業の発展それ自身が，社会的分業の

複雑な比例を発展させる。「需要供給は，さらに分析してみれば種々の階級および階級部分――その間で社会の総収入が分配されて収入として消費されるような，つまり収入によって形成される需要を形成するような，種々の階級および階級部分――の実存を内蔵するのであるが，また他方では生産者としての生産者たちの間で形成される需要供給を理解するためには，資本制的生産過程の総姿容への洞見が必要である」。このマルクスのことばの暗示するものは，おそらく，再生産表式上のバランスのことであり「産業連関表」のバランスのことであろう。

資本と労働力のたえざる移動は，不均衡をたえず均衡化するとともに，一時的にはよりするどい不均衡をつくり出す。その最もはなばなしい結果は，恐慌，すなわち社会的総資本の流通の全般的混乱を媒介として発生する，生産物の破壊（価値破壊を媒介する使用価値の破壊――滞貨による減耗，生産地における生産物の破棄）および生産力の一時的破壊（利潤率低下を媒介する生産資本の一部破壊――設備の遊休，失業）であろう。このような社会的分業を組織する上での危機は，もちろん社会的分業一般からではなくて，資本制的商品と社会的分業との関係から説明されなくてはならないであろう。

(1) マルクス「資本論」，青木文庫(1)，174頁。
(2) 同　上，(9)，266頁。
(3) 同　上，(9)，286頁。
(4) ブリューミン，前掲書，126頁。
(5) マルクス，前掲書(9)，284頁。
(6) 山本二三丸「価値論研究」，青木書店，参照。
(7) マルクス，前掲書，(9)，277頁。
(8) マルサス，玉野井訳「経済学における諸定義」，岩波文庫参照。
(9) マルクス「資本論」，(9)，278～281頁。
(10) 同　上，(9)，280頁。
(11) 同　上，(9)，284頁。